

## 中 国 点 描

富山県農村医学研究会 豊田 文一

## はじめに

昭和63年10月7日より10日まで第4回アジア農村医学会が北京において開催されることになり、6日成田より北京に飛んだ。

私はここ数年間中国を訪ねる機会があり、昭和54年、戦後日中国交回復に盡力された松村謙三先生顕彰会の訪中団に参加、北京を始め大同一太原の山西省を巡遊し、さらに60年高岡市と遼寧省錦州市と友好都市盟約を提結するとき、高岡市名誉市民として、市民の代表ということで赴いた。前2回は空路成田より上海経由、南京より北上し北京への経路をとったが、今回は済州島上空より北上し、遼東半島の先端、大連に着陸、約半数の乗客を降ろした。

ちなみに中国へわたるとき、地名の呼称について注意を受けた。用いてはならない言葉、満州、奉天、新京で、東北、瀋陽、長春と言えど。

この大連は遼東半島先端にあり、旧名は旅順を含めて旅大市。日清戦争のとき日本軍が占領した。三国干渉（ロシア、ドイツ、イギリス）のあと1898年ロシア帝国は清朝から大連と旅順を租借し、大連を自由港、旅順を軍港とし、ニコライ皇帝の命により大連をダルニーと命名していた。1905年日露戦争に勝利を取めた日本は遼東半島を租借、関東州と命名、大連に関東庁をおき、中国の東北部に対する侵略と半植民地的支配の拠点とし、旅順を海軍の要港とした。ことに大連よりハルビンに至る南満州鉄道は第2次大戦終結まで日本の旧満州の生命線で、帝国主義的植民地収奪の拠点ともいえる。

この空港で奇異に感じたのは、警備にあたる女性兵士で、軍服には階級章をつけているが、すべてハイヒール、化粧も濃く、果たして事故などがあつたとき敏捷に行動できるかどうか疑問に感じた。

## 大連—北京

大連の上空に達すれば、遼東半島先端まで俯瞰しうる。渤海上空である。日露戦争の激戦地203高地、広瀬中佐の旅順港封鎖、はたまた乃木將軍とロシア司令官ステッセルとの降服調印の水師営も眼下である。小学生頃歴史で教わつた記憶が今でも残っている。約1時間足らずで天津に近づく。この外港の大沽や塘沽付近の海面はすべて塩田、昭和12年8月日中事変勃発、私は召集され、わが金沢師団（第109師団）は天津に集結、作戦準備中大沽や塘沽へ赴き、ピラミッドのように積み上げられた岩塩の山積みで度肝をぬかれたことが、かすかに蘇る。わが国ではかつて塩の生産は瀬戸内海にみられ風物詩のようであったが今生産は皆無、中国や東南アジアからの輸入に頼っている。

ここより約30分で北京空港に着陸。



北京空港

#### 第4回アジア農村医学会場

学会場は、北京市懷柔県の温陽飯店、会場の正面には「歓迎第4回亜州農村医学会初級衛生保健学会代表」と横幕が掲げられている。



会場入口

また入口玄関には「歓迎朋友」の掲示があり暖かくむかえてくれる。ただ色々の文字が方々で見られるが、すべて簡化文字、日本でみなれた漢字の常識では了解しにくく、想像するより他ない。(なおこの簡化文字については、拙著「有情余情Ⅰアジアの巻」に詳細に記述した)。この飯店は賓館(ホテル)といい日本人その他の外国人200名はゆったりと収容できる。食堂もゆったりしている。会場は3会場、中国側は十分意をつくしてくれた。



学会場

会期中、北京市内観光、万里の長城への案内に便宜を与え最大の好意が与えられた。医学会の内容は何れ日農医誌に掲載されると思われるので略するが、日本のように検査方法や手術手技の如きものはなく、すべて農村医学の真髓にふれるものばかりであった。

シンボルマークはRMPHC (Rural Medicine Primary Health Care)で、下図の如きデザインである。

ただ農村見学にしても、指定された以外は入れず、バスで通りすぎるにしても垣間見るにすぎず、マルクス主義国家のきびしさが感ぜられる。

しかしバスを走らせると、道路はキープクリーンで、その住民は常に清掃を心がけているのに、心をうたれる。日本の道路のように煙草のすいがらのほおり捨ては全くない。

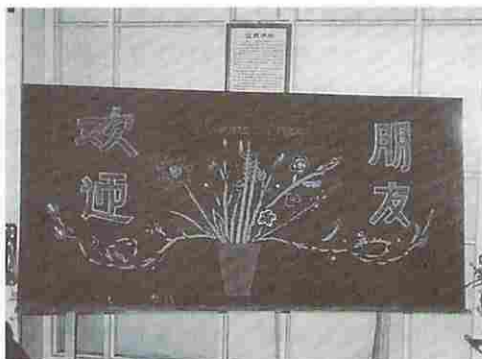


道路の清掃

かつてある人の中国よりの帰来談で、天安門前の広場で煙草の吸いがらを捨てたところどこからともなく女性監視人がきて、罰金35角とられたと私に話してくれた。

以前に明の十三陵に見物に行ったとき箒を背にした清掃隊が、隊伍をととのえ行進してくるのを見たことがある。

なお次図は、会場の玄関前の「歓迎朋友」の掲示である。花の絵をそえ心が暖まる。



朋友歓迎の掲示

## 人民大会堂

北京の天安門前広場の西側中央に堂々たる建造物、人民大会堂がある。去る10月7日、北京で開催された第4回アジア農村医学会出席のため2年振りに中国へ渡航した。その開会式は人民大会堂である。一般の人々にとっては外からその威容を眺めるだけだが、開会式はそのメインホールで行われた。

開会式は中国衛生部の首脳が列席、それらの歓迎の挨拶のあと歓迎宴が行われた。そもそもこの人民大会堂は、解放後の中国の公共建築を代表するものとされている。これは中国建築の粋をこらし1959年完成したもので、その総面積は17万1800㎡、この大ホールは5000人収容可能といわれる。歓迎宴のもてなしは中国料理の粋を集めたもので数10種あったように覚えているが、バイキング様式、巷の中国料理とちがいが美味求真の趣がある。アルコールも十分出され、余り食いすぎてたちまち満腹、ただ果物は梨と林檎が出されていたが、一つ二つ味わってみたが、日本のそれと比較して味は最低、一口二口食べてそれ以上は味わえない。恐らく日本の品種改良の技術の卓越が頭のなかをよぎる。

さてこの大会堂の前庭は天安門広場、約1m角の石畳が敷きつめられてあり、人民大集会のときその石畳一つ一つに一人ずつ立って50万人収容できる大広場である。大きな広場といえばモスクワの赤の広場を想起するが、それより広いような気がする。

とにかく約10日間は全くの賓客扱いで、学会の会場と宿舎に当てられた懐柔県まで約60キロ、北京からホテルまでバスで送ってもらえるが、先導車に警察のバトカーが護衛し、サイレンをならしながら、赤信号も無視し、ノンストップ、これもこの学会の参加者を賓客の待遇をもってし、その好意に感謝せざるをえなかった。

なおこの広場の北側は王府巷、南側は故宮、東側は政府機関の建造物と公園となっている。



天安門前広場

とにかく人民大ホールは、中国の最高責任者の会議に使用されているもので、私どものようなエトランゼーは到底内部をうかがい知ることができないもので、日本からの約100人の参加者は得難い経験を味わったといえる。

なおこの天安門広場には、約50万人収容しうる。その石畳は方1m位のものだが、これはテコを入れると簡単にめくれるそうである。その下に水流があり、便意をもよおしたとき、これをこじあげ、そこで用を足す。中国の人々は用を足すとき人の前で恥ずかしがらないように思われる。何分にも50万人の大集会では、遠くのトイレへ走ることが無理かも知れない。

## 紙幣の怪

紙幣とは紙を素材とする通貨で、金属を素材とする鑄貨または硬貨と対立するものである。私は買物のため懐柔県のホテルで日本の円紙幣と交換してもらうと外国人用の紙幣を渡してくれる。これは中国人は使用できない

ことになっている。今まで私は歩いた国は約30数国になるが初めての経験である。3年前中国へ渡航したが、こんなことはなかったのが最近からこのようになったのかも知れない。

紙幣の沿革を探ねると、世界最古の紙幣は中国の漢の武帝（在位141—87B.C.）の時代であるといわれる。しかし紙幣の存在しなかった当時は獣皮を素材として用いたと伝えられている。

文献によると古代カルタゴ、中世アングロサクソンにも皮幣が存在したといわれる。中世にあつては、ヨーロッパで国王に造幣主権があり、造幣局で作った銀貨銅貨が主たる通貨として流通した。その後の政府紙幣を発行した時期では鑄造の品質を下げ、名目価格の引き上げて収入を得ることが一般的に便宜な方法となる。

元来紙幣の流通はある程度信用経済が発達するまでは不可能であり、国家権力をもってしてもその流通を強制的に成功させることができないから、戦費の調達、王室の経費補填には鑄貨の改悪の方法によらざるをえない。

私は昭和12年日中事変勃発とともに河北省、山西省に駐留した。そのきの俸給は中華連合銀行券（連銀券）で支払われ、これは日本の円と同価値とされ、これで買物をしたし、第2次大戦中、フィリピンやインドネシアでも日本は紙幣を発行し流通せしめていた。戦後、不交換紙幣となり、この地の人々からその賠償のため経済的無償援助をするのは当然だといっていた。

なおチェコスロバキアを旅行したとき空港で1日10ドルの割で滞在日数だけこの国の紙幣と交換させられ、国外に出るときすべてドルに交換させられた。またソ連より帰国するときハバロフスク空港で、残りのルーブルは持ち出し禁止でやはりドルあるいは円紙幣と交換させられる。これはそれぞれの国の紙幣をスパイなどが入手し、陸続きの東欧などは侵入しやすく、それを防止するための措置と

考えられる、しかし中国の如く外国人用と中国人用の紙幣のあるのは他の国でみられない奇異なことである。



中国人用紙幣



外国人用紙幣

なお中国での旅行は、非常にきびしく、もし特別の地域に赴くときは、改めて旅行許可書を交付してもらはなくてはならない。旅行証不要の都市は31市で、北京、天津、杭州、蘇州、上海、南京、ハルビン、長春、太原などで、もちろんそれ以外の農村への視察も、中国衛生部が予め設定してくれ、外国人に見せられない恥部は外国人の眼から遠ざけるように思われ、マルクス主義の住民の本当の姿をみるができなかった。

## 大 運 河

私どもは空路北京より杭州に南下、この地では西湖、銭塘江界隈の名所旧蹟を探勝したあと蕪州へ向かう。その間約50キロは大運河を利用することとなる。

薄暮、杭州の船着場より乗船、その船は約50トン位、私どもを含め100人くらいの乗客、内部は4人用に寝台がしつらえられた部屋が並び船の中央に食堂も設備されている。もうすでに夜のとばりもおり静寂のうちに暮れゆく。

往古この運河は北は北京より南は杭州まで3795キロに及んだといわれる。6世紀隋が中

国大陸の南北を統一した後この交通路が完成したと伝えられている。しかし16世紀頃、黄河の決壊や流出する土砂の堆積により舟運が杜絶し、運河の航路の変遷をみられている。

杭州—蕪州間は河幅約50m、水深5m位あり、エンジンの音を響かせながら蕪州に向かう。早朝船上にいれば、見渡す限り江南の沃野、刈り入れ前の瑞穂がはてしなく広がる。この大運河の輸送を生活の糧にしている水上生活者を蛋民（タンミン）といい、小さな船に苦屋<sup>とまご</sup>、すなわちトタンやワラの粗末な屋根をふいて朝げの支度をしている。この蛋民は江南地方に古くから住みつき船を住居として一生を過ごす。一般の人々から賤民視され、社会的待遇も悪く、陸上の人々から顧みられない。

この蛋民は、古い時代巫蛋（フタン）蛮艇（バンタン）、夷誕、蛋家などともいわれ、彼等のなかに龍蛇を信仰するものも多く、龍戸ともいわれている。この蛋民と称せられるのは、宋代以後で、広漠たる中国で最も豊かな耕作地のなかに大運河一筋に生きる。これも上意下達のマルクス主義政治下で、緑の大地に足をおろすことなく人生を終える。私も数多くの開発途上国を旅したが、その生活面で最低のように思える。

ただ清の末期より京漢線（北京—漢口）、津浦（天津—浦口、南京）に鉄路が開通し、運河利用が衰退、今は杭州—蕪州に往昔の面影を残し、数限りない人民を動員し、しかも



血と汗での努力で作上げたこの大運河、中国の歴史の流れがひしひし身にしみ、多数の観光客の思い出の一つであろう。

図は大運河を航行する蛋民の船、後尾の方は、生活の場所、へさきに堤防補修用の砂利を積み決壊した堤防の補修に向かう。対岸には、既にうず高く土砂が積み上げられている。

なお中国を旅行するとき、旅行許可証なしに自由に訪問できる都市は、例えば北京、天津、上海、蕪州、杭州、済南、青島、ハルビン、瀋陽（奉天）、広州、武漢などでそれ以外は拒否されている。推測すれば、マルクス主義の国では、国民生活の恥部を外国人の眼にさらしたくないように考えられる。

私はかつてソ連に学术交流のため渡航したとき予め定められた地域以外訪問することはできなかった。その地域でも25キロ外の視察は断られた。これは総べての共産圏の通例のように思われた。

## 人口問題

中国の人口は、国際統計（1987）から拾うと105,953万、その増加率は1.2%（日本0.7%、1985）となっている。しかし統計の科学的処理の幼稚なこの国では正確かどうか判じ兼ねる。ただ過剰人口に悩んでいることだけは事実である。

街を通ると「晩婚晩育、志在四化」のポスターが屢々眼につく。志在四化とは国民に対して工業、農業、国防、科学技術の近代化と



晩婚晩育のポスター



早孕検査のポスター、早く中絶の奨励

いう意味で、晩婚晩育はその字の如く、人口増加の抑止策の周知徹底に躍起となっている。

また一方、「早孕検査」のポスターもあり、妊娠早期に中絶を行えとの意で、前回渡航したとき聞いた所、これはもちろん無料。

最近入手した中国英字誌チャイナ・デリーの記事を摘録すると「非合法的な婚姻の増加で、中国政府は明年（1989）の全国人民代表大会（日本の国会に当たる）で、婚姻法を改正、役所に婚姻届を出さずに同棲しているカップルに罰金を、さらに別居命令に従わない場合は施設収容」という厳しい手段をとることになった。

中国では婚姻届を出すよりも、結婚式により結婚を認知する習慣があり、民政局の昨年の調査では「違法な同棲が結婚生活者の20%から25%にあがり、農村では90%にも達している。現在の新婚姻法は1981年に制定され、法定結婚年齢を男は22才（旧法では20才）女は20才（旧法では18才）とし、役所に届出るよう定めているものの罰則規程はなかった。（日本では民法731条により男は18才、女は16才）。

罰金は50元（約1750円、これは労働者の平均月収の約半分）から300元にされる予定といわれる。役所の決定に従わないものに対して、裁判所は別居命令を命じ、それでも同棲を続けるカップルなどには、労働救護という収容所に入れ、政治教育と労働で更生させる制度で、収容期間は1年ないし3年の厳罰

に処せられる」。

以上のように人口抑制に必死となっているものの広大な版図をもつこの国では、実施可能かどうか疑問である。

### 無料自動脱穀機

北京郊外の舗装道路に車を走らせる。ところが道路いっぱい茎のついたままの刈りとったばかりの農作物の束が並べられてある。2、3年前山西省でもこれを見たが、粟、高粱、稗などを道路に並べて自動車の車輪の回転で、穀物の殻がつぶされ、中味がはじき飛ばされる。その側で見ている農民がすばやく飛び出してこれを掃きあつめ、その殻も側によせる。私どもは手にとってみると大豆であるがつぶされたものも多い。どうせこれを石臼にかけて粉にして食料とするのであるから大豆の形が残らなくてもいいわけである。

最近ベトナムを旅行した人の手記に同様の記事があり、名付けて「無料自動脱穀機」と記されていた。実は石田富山市民病院長も山東省でも同様の風景をみられ私に話された。しかし今回旅行した江南地方では見ることがなかった。

私どもの幼い頃、穀竿（カラザオ）という農具があつて竿の先にひもでつないだ小さな竿をひもでつなぎ、穀物を莫産の上にのせたきつけていた風景をみた記憶がある。富山の方言かも知れないが、「バツタ」といっていた。



同行の人は、この風景が珍しく車を止めて、しばらく感心しながら眺めていた。

なお中国も農業の近代化が進みつつあるようで、訪れた大都市近郊では、所々に農業機械（刈取機、耕耘機など）が軒下に収納されていた。

ただ中国では10億の人口を擁し、今世紀末12億5千万と予測されている。農業を主産業とするこの国で、近代化による余剰人口をどうするか問題が残る気がする。すでに述べたように晩婚晩育で解決しうるだろうか。

マルクス主義の上意下達、政府の施策に異議をさしはさむことができない。自由主義国家の日本の有難さがひしひし身にしみる思いがした。

なおこの無料自動脱穀機のルーツは何処からきたか、江南の太平洋岸では1ヶ所もみられなかった。今後中国に渡航する機会があれば、検索を試みたいと思っている。

## 村の診療所

私どもは学会の暇をみて、農村医療をみたかった。しかし中国では指定された地区以外では自由な行動はとれない。その指定された診療所は西台下村医務室である。部屋に入ると診療室は約5坪位で椅子とベットと机があり、入口を除いた3方の壁には戸棚があり、可なり多く仕切られ、引き出しになっている。ここに薬が収納され、薬名が貼布されてある。それには苦杏仁、高良、生姜、天花粉、青蒿、珠母、竹茹など数十種であるが、ショウガ生姜、天花粉以外は何がなんだか判らない。ここは医師1名で、引き出しから薬をひき出し、棒天びんで目方を計っている。今時棒天びんなどは時代ものである。

これに引き続き、保健所と県病院を視察した。前者の建物はととのっていたが、検査機械が少なく果たして十分な検査ができるか疑問である。県病院ベット数150、建物は鉄筋コンクリートで先ず先ずのものであるが、C

Tが1つあったものの診断施設は乏しい。ここでは小児病棟は整っており、4室あり1室に6名入院し、中央が看護室で、すべて硝子越しに仕切られ、見通せるようになっており、ここだけは近代적のおもむきがした。

さて国共戦争が終結し、共産党が実権を握り、全国に人民公社を設立した。1959年にはその数2万4千、そのなかの医療を行うものは「はだしの医者」というものにまかされていた。この「はだしの医者」は戦争中の衛生兵あがりのものである。その技術について国民の生命健康を任されるものではない。わが国でも一部のマルクス主義者の間で評価したのものもいた。

私は下図の写真にある如く西台下村の医務室（診察所）の門柱に赤い十のマークがついているのに奇異の感をうけた。それで私は赤十字のマークについて詮索してみた。日本ではこの表示について商標法（昭和34年）という法律がある。その第1条に「商標を保護することにより、商標の使用するものの業務上



の信用の維持を図り、もって産業の発達に寄与し、あわせて需要者の利益を保護することを目的とする」とある。第4条の(1)に「次に掲げる商標については商標登録を受けることができない」。そのなかの(4)に「白地赤十字の標章は赤十字若しくはジュネーブ赤十字の名称と同一又は類似の商標と」具体的に禁止されている。1883年パリ条約で定められたものである。中国はこのパリ条約に加盟してい

るかどうかわからないが、途上国でもあるし勝手に使っているのかも知れない。

わが国の法律では、みだりに使用した場合「6ヶ月以下の禁固または1000円以上の罰金に処する」という罰則づきである。日本ではこれまで赤十字のマークは「いざという時の救護活動をします」という印。私のみた村の診療所は深い意味も判らず医療施設であるという看板に用いたような気がしてならない。



## 農村 瞥見

先に述べた如く、指定区域31都市（北京、天津、西安、南京、上海、蕪州、杭州、青島、瀋陽、広州など）以外は外国人の出入りは許されない。私どもは中国の農村をつぶさに視察しなかったが、それは不可能であった。

私は昭和59年遼寧省錦州市郊外、昭和61年に日中国交回復の立役者松村謙三先生顕彰会の一行とともに大同一太原間をバスにて旅行したとき、その途中で所々農村に立ちよったが、私が昭和12年10月より約2年半山西省進行作戦に参加し駐留したときと50年の歳月が流れているが、農村の様相はほとんど変わっていないかった。（詳細は拙著「有情余情Ⅰアジアの国々」にて叙述）。

僅かに行動の自由だったのは、懐柔県近傍の農村のみで、ここは可なり大きな集落を作っている。その農家の2、3軒へ入ってみた。大抵同じ構造で、居室は1つ、これを半分に仕切って、一方は炕（オンドル）で、一方は

低い棚となり、食事の用意をしたり、身づくりする台がおいてある。寝間には、布団が巻きつけられて片隅に片づけてある。



農家の居間、寝室

この一棟の居間の前方に小さな建物があり、中には農機具がおいてある。前庭には手押しポンプで水を汲み上げている。色々と農業について聞いてみると、作物は粟、高粱、大豆、その他野菜で、政府の命令で一定量は強制供出、しかしそれ以上の収量があれば、自由販売が許され個人の収入となる。価格は供出よ



野菜の自由販売（北京市内）



りやや高い。北京のワンフーチンや市内の歩道には、野菜類を売っている所が散見できる。

何分にも人口10億を越え、人民政府は食糧増産に躍起となっている。国際統計から拾ってみると平均寿命男66.70才、女68.40才（1980～1985）日本は男75.23才、女80.90才（1986）である。食糧摂取カロリーは1日2,602カロリー、（日本2,858カロリー）。

また農地1ha当たり肥料消費は窒素肥料35.4kg（日本129.6kg）、磷酸肥料9.6kg（日本141.4kg）加里肥料2.1kg、（日本116.8kg）で

雲泥の差であり、いわゆる有機農業とも称すべき糞尿、灰、腐熟したワラ類を用いているように言っていた。

なお人口問題は先に述べたが、極力産児制限につとめ出生率は人口1000人当たり19.0人（1980～85）、日本の13.1人に比べてかなり高率である。また死亡率は1000人当たり6.7人（1980～1985）、日本の6.5人と大差はない。

以上農村を瞥見したに過ぎないが、国民が「食うためには主義主張もない」とささやいている事実が判るような気がする。